

## 古墳時代に登場

笏谷石（しゃくたにいし）とは、火山活動で降り積もった灰が固まってできた火山礫凝灰石で、主に福井市足羽山一帯で採掘された石を指す。なかでも、足羽山北西側山嶺の笏谷地区の石質が優れていたことから、笏谷石という名称がついたと言われている。笏谷石には青緑色で水に濡れると深い青色に変化する、軟らかく加工が容易であるという特徴がある。

笏谷石が最初に福井の歴史に登場するのは約1500年前の古墳時代で、九頭竜川流域の有力古墳の石棺に利用されていた。その利用が一気に拡大したのが戦国時代以降



⑤福井城址。石垣に笏谷石が使われている ⑦柴田勝家が笏谷石で屋根を葺いたと言われる北の庄城址



⑥福井城址。石垣に笏谷石が使われている ⑦柴田勝家が笏谷石で屋根を葺いたと言われる北の庄城址

# 採掘中止が注目度高める

### 市内足羽山一帯で産出された笏谷石

で、当時の越前国を支配した朝倉氏の一乗谷朝倉氏遺跡からは、笏谷石の石仏、石塔などが多く出土している。また、柴田勝家が越前国に入った際、北ノ庄城の屋根を瓦で葺かず、笏谷石で葺いている。その後、結城秀康により築城された福井城は堀の石垣に笏谷石を使用しており、当時から建築素材として利用されていたことがうかがえる。江戸時代以降は、足羽地区付近を流れる足羽川（現在は一級河川）を利用して三國港まで運び、北前船によって各地へ利用が広がっている。近接する石川県や富山県のみならず、北海道や青森県でも当時の笏谷石を使用した石仏、石廟、石蔵が残っている。足羽地区は古くから市街地として栄え、現在も足羽神社を中心に、多くの神社や寺院がみられる住宅地域である。福井市でもモーターゼーションの発展や区画整理などによる市街地の拡大により、住宅地需要の中心が中心部周辺から、郊外の大規模商業施設や主

要幹線道路へのアクセスに優れる新興住宅地域へ移っている。その影響を受け、足羽地区は、市内住宅地で相対的に地価下落が大きい地区となっている。

**観光資源での活用を**

笏谷石の採掘は99年に終了しているが、福井城址の石垣や丸岡城、一乗谷朝倉氏遺跡など多くの歴史的観光資源において笏谷石が利用されているため、県内のあらゆる場所で笏谷石を見ることができ、新規供給がないことから現在の供給は古民家の解体で

一般財団法人日本不動産研究所 ⑬  
**地域資源を生かす**  
 ～まちづくりからインバウンドまで

**福井県福井市**

採石場跡は一部が県内酒造所の熟成貯蔵庫として利用されているのみで大部分が利用されておらず、立ち入り禁止の状況にある。坑道であるため、温度がほぼ一定に保たれ、坑道入り口付近では、暑い日でもひんやりとして、快適な状況にある。大規模な安全対策が必要になるが、坑道内を一般見学可能な状態に整備すれば、JR福井駅からも近い市街地に位置することから、大きな観光資源になるのではないだろうか。

（福井支所、不動産鑑定士・宮岡広英）

発生した廃材など、小規模なものに限られている。これらを利用して、湯飲み、石杯に加工した商品が県内土産物店を中心に販売されており、県内観光に一役買っている。



七ツ尾口採石坑跡。酒の熟成貯蔵庫として利用されている